アーノルドの古典主義

川田周雄

二、『序文』の成立——詩人対批評家

「詩人マシュー・アーノルドのなかには格闘する二人の人間がいて、たがいに精根をすりへらした揚句に、詩人は死んだ。[1]」——J・M・マリーは一九二四年に出版した論集 *Discoveries* に収められたアーノルド論の冒頭のこの一文で、アーノルドの詩の核心を端的に捉えている。みずからが豊かな詩的精神に恵まれたこの明敏な批評家の洞察には、もはや付加うべきなに物もないように思われる。まったくのところ、優れた批評家というものは、亜流の徒を励ますよりは絶望させる方が多いものである。長年アーノルドの詩と散文をひねくり回し、それに関する研究書を漁ってきた後に、はじめてマリーのこの一句にであった時には、しみじみ下根の悲哀を味わったことであった。文字通り巻をおいて歎ずること久しくあったのであるが、気をとり直して第二節に目を移し、「われわれはその一方をロマンティックとよび、他方をクラシックとよんでよかろう。あるいは一方を心情、他方を頭脳とよんでもよいかも知れない」という文章を読んだとき、この二者の格闘によって詩人は死んだとしても、この死を生きのびた批評家アーノルドを対象としている私には、まだ言うべきことが残されているという一種の安心を感じたのであった。というのは、前章でもふれたように、古典主義者としてのアーノルドは、結局のところロマン主義の流れにそった作品によって後世に記憶される詩人アーノルドの死を生きのびて、批評家とし

ての地位を確立したというのが私の見方だからである。詩人としてのアーノルドのみを扱ったマリーの立場からは、冒頭の一文は実にあざやかに問題の核心をついているのであるが、アーノルドの生涯の文学活動を対象とし、詩人から批評家への転身を当面の問題としている私にとっては、詩人アーノルドのなかにいたロマン主義者と古典主義者は、とも死にしたのではなく、むしろ前者が後者に殺されることによって、詩人が批評家に変ったと見なければならない。

前章で論じた一八五二年の『序文』は、古典主義批評家アーノルドの第一声にすぎず、詩人から批評家への完全な脱皮にはさらに時を要した。私は本章と次章とでこの間の消息を明らかにしようとするのであるが、まず注意すべき点は、マリーの指摘するように、アーノルドが専ら詩作に傾倒していた初期の作品のなかに、古典主義的傾向がすでに明瞭に認められるということである。アーノルドが古典からその詩の題材を得たことがいかに多かったかということについては、前章でも言及したブッシュの大著『英詩における神話とロマン主義の伝統』(一九三七年)の一章によっても明白である。題材の重要性、そして古典から得た題材が、めまぐるしく変化し、人間性が卑小化した近代乃至現代から得られた題材に勝るというのが『序文』の重要な主張の一つではあったが、この面については、私は上記のブッシュの著書に譲って、あまり詳細にふれる積りはない。本稿では、四九年と五二年の二冊の詩集とその頃までのアーノルドの書簡、わけても友人クラフに宛てられた手紙を資料として、初期の作品に現われた詩人の思想を跡づけることとしたい。この場合、詩に歌われている思想を、書簡の中の言葉によって裏づけるという、常套的とは言え手堅い方法をとることが出来るのである。

このような観点に立って"The Strayed Reveller and Other Poems"と"Empedocles on Etna and Other Poems"の二巻をひもどいてみるときに、最も顕著に認められるのはアーノルドの自然観であると言えよう。

主として第二詩集で発表された謎の女性マルグリートや、後の妻フランシス・ルシーとの恋を歌った作品でさえ、当時のアーノルドがとりつかれていた自然についての思索、或いは自然への憧憬が、なんらかの形でつきまとっているのが常態なのである。また間もなく述べることになるが、"The Strayed Reveller" や "Resignation" のように、詩人の本質を問題としている作品では、彼の自然観の基調はことに明瞭にききとられる。ワーズワースと同じ湖畔地帯の自然に親しみ、この自然詩人を師として尊敬したアーノルドにとっては、これは当然のことであった。このアーノルドと自然という問題については、私は数年前に一度論じたことがあるのであるが、[2] 甚だ意にみたぬ点が多々あるので、改めてここで再考を試みることを許して戴きたい。

真理という問題ととり組んだ十七世紀の英詩人から、十八世紀前半の古典主義者たちが、自然を理性の原理として捉えたのに反して、ワーズワースにおいては、これが感性の原理とされるに至ったというのが、バジル・ウィレーの一連の研究の主要な骨子の一つであったと信じるが、アーノルドにおいては、十八世紀的な理性的原理としての自然と、ワーズワース的な感性的原理としての自然とが、その心中で覇を争い、次第に前者が優勢をしめることによって、古典主義批評家アーノルドが確立されたとするのが、大ざっぱに言って私の見通しなのである。ただし、感性的原理としての自然については色々の問題があり、それはまた理性的原理としての自然とも、必ずしも截然と区別することは容易ではない面もあるのであるが、差当ってはワーズワースの言う "The mighty world of eye, and the ear"[3]——つまり感覚を通して詩人の心情に働きかける外的自然、あるいは自然の風物をさすものとしておいて戴きたい。アーノルドがこの自然に対して素直に心をひらき、いわゆる自然哲学に煩わされることがない場合、あるいは少くともこの自然によって喚起された情操が一篇を支配して、哲学がその蔭にかくれている場合に、彼の最も優れた詩が生れたのであるが、そのような作品は古典主義批評家アーノルド

からはむしろ低く評価された。[4] この点については後に詳しく述べるであろうが、ワーズワースの名が出たついでに一言申述べておきたいことは、自然科学に対するアーノルドの態度である。科学のもたらした思想の混乱、既成宗教とその信仰の衰退を歎く声は、彼の詩のなかにしばしば聞かれることは周知の事実であるが、キーツにことに著しく、また『抒情歌集』第二版の序文ではこの点について希望的乃至は妥協的であったワーズワースでさえ、"The Tables Turned" の有名な一節で "we murder to dissect" と歎じて、人間の感性、ひいては人間性そのものの敵として弾劾した自然科学、あるいは分析的理知に対して、アーノルドは生涯を通じて明白な敵意を示したことがないのである。[5] この事実は一面において詩人アーノルドの限界を暗示すると同時に、彼が結局のところ時代の子としてとどまったことを物語るのであるが、その反面においては、当時の社会、教育、文明について論じた批評家としてのアーノルドの強味でもあったのである。

われわれが当面している時代を隔ること廿年あまりの後に出版された『文学と教義』の一節で、「自然という言葉のなかには、いかに多くの陥穽があることか」[6] という歎声を発したアーノルドではあったが、詩作に没頭していたこの時代の詩人アーノルドにとっては、自然との対決がいわば生死の問題でさえあったのである。考えてみれば、対象化された外的自然を客観的に死後検証する自然科学の立場からではなく、人間性そのものをその内包する生きた自然を、主観的に詩のうちに捉えようとすることは至難の業というべきであろう。哲学的な自然観を韻文で書くことは容易である。しかしそれが詩ではないことは、アリストテレスがエムペドクレスの著作について、早くも指摘している通りである。(『詩学』一・八) アーノルドの詩においても、夜風、地神、あるいは直接に擬人化された「自然」等の声という、デウス・エクス・マキーナによって自然哲学が述べられている作品が、[7] 詩としての価値に乏しいことは争えぬ事実である。このような、いわばむき出しの自然観を語る詩は論外として

も、自らが、少くとも自己のなかばが、そのうちに含まれる自然というものは、感性の論理を以てしても容易に捉え得るものではない。それは永久に対象化し得ぬものを対象としようとする、空しい努力に似ていると言えるであろう。『エトナ山上のエムペドクレス』の次の一節をよむと、アーノルド自身もこの間の消息を意識していたようにも見える。

All things the world which fill
Of but one stuff are spun,
That we who rail are still,
With what we rail at, one;　　(I. ii. 287—90)

(世界を満たすべてのものは、ただ一つの素材から成っている。嘲罵する人間も、嘲罵される世界と別物ではない。)

この点を考慮に入れてみれば、アーノルドの自然観に矛盾が認められるのは、単にその場その場の詩人の主観の変化のみによるのではなく、主題そのものに内在する困難にも由来するものと考えられよう。事実、"The Buried Life" のような、さして長くもない一篇の詩の中に生じている思想的混乱が、その証拠であると言えるのである。それはさておくとして、われわれはアーノルドの自然観そのものが、どのようなものであったかをまず見ることとしよう。(ここであらかじめおことわりしておくが、以下に引用する作品は、原則として、二巻の詩集が発表された時のままの形によっている。)

処女詩集の巻頭にあり、また五三年の詩集でもその巻頭を飾る名誉を与えられ、後に "Quiet Work" と名づけ

られた有名なソネットに、作者の自然観の基調の一つがあきらかに打出されている。われわれはまずそれに耳を傾けるとしよう。

Two lessons, Nature, let me learn of thee,
Two lessons that in every wind are blown,
Two blending duties, harmonis'd in one,
Though the loud world proclaim their enmity ——
　　Of toil unsever'd from tranquility:
Of Labour, that in short hour outgrows
Man's noisy schemes, accomplish'd in Repose,
Too great for haste, too high for rivalry.
Yes, while on earth a thousand discords ring,
Man's weak complaining mingling with his toil,
Still do thy sleepless ministers move on,
Their glorious course in silence perfecting;
Still working, chiding still our vain turmoil;
Labourers that shall not fail, when man is gone.

ゲーテの有名な詩句をふまえ、ミルトンの格調をわがものとしたこの初期の秀作は、後に推敲を加えられてさらにその光輝をましている。ここに歌われた外的自然への憧れ、急がず、しかも撓まず、静寂のうちに偉大な変化

をなしとげる力、人間が死んだ後も、あやまつことなくおのが仕事をはたす自然の讃美は、その後もしばしばくり返されているのであるが、この一篇のように、純粋で力強い、ひたむきな作者の情緒に支えられたものはまれである。このような若々しく純一な詩境が急速に変化して、クラフについてアーノルド自身が用いた言葉でいえば **"his piping took a troubled sound"** ("Thyrsis" l. 48) とも言うべき詩境に移った最大の原因が、マルグリートとの恋の破局にあったことは恐らく確実であろう。私はさきにふれた数年前の試論で、この処女詩集の巻末におかれた **"Resignation"** のなかに、この彼の恋愛の失敗がすでに反映されているという推測を下したのであるが、その当否は別としても、五二年の第二集に、後になって **"Switzerland"** および **"Faded Leaves"** という名のもとにまとめられた恋愛詩とともに、自然観、或いはそれに基づいた人生観を歌った詩が前詩集よりもはるかに数多く、しかもその詩境がいっそう複雑な色調をおびてきたことは、明らかに主として彼の「失恋」に由来すると言えるのである。

——この稿未完——

註① "Matthew Arnold the Poet" (*Discoveries*, p. 203).

② 『Matthew Arnold の詩における自然』(*The Albion*, New Series, No. 2. March, 1953).

③ "Tintern Abbey Lines," 105-6.

④ Cf. "I am glad you like the Gipsy Scholar — but what does it *do* to you? Homer *animates* — Shakespeare *animates* — in its poor way I think Shorab and Rustum animates — the Gipsy Scholar at best awakens a pleasing melancholy. But this is not what we want". (Letter to Clough, Nov. 30, 1853. Lowry, *op. cit.* p. 146)

⑤ アーノルドは科学について纏った文章を残していない。文学者の一人として詩（文学）の方を科学以上に評価していたろうとは想像されるが、人間にとって、ことに現代人の教育にとっては、文学と科学が車の両輪の如きものであると考えたことは *Discourses in America* 中の "Literature and Science" や *Higher Schools and Universitis in Germany* の第八章を見れば明らかである。

⑥ *Literature and Dogma*, p. 207 (ed. John Murray).

⑦ Cf. "Self-Dependence," "The Youth of Nature," "Morality."